

ある少女の残響

ぱう課長

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

グリフィンと鉄血との戦いの裏。

回収屋のカイリ・ウエルロッドは、鉄血司令部で破壊されたグリフィンの人形を発見する。

*こちらの作品はpixivでも投稿しており、すでに完結しております。

一話となるセカンドチャンス以降、週一ペースで投稿いたします。

(他作品の執筆もあるので、遅れる可能性もございます。)

目次

セカンドチャンス〈1〉	1
セカンドチャンス〈2〉	5
セカンドチャンス〈3〉	10

セカンドチャンスへ1

——テクノロジーは倫理的には中立だろう。我々がそれを使うときにだけ、善悪が宿る。

この辺り一面に広がる灰色を見るたびに、思い出される言葉だ。確か、二世紀くらい前の作家の言葉だったはずだ。

この言葉ほど、今日のこの世界を皮肉れるものはないだろう。

崩壊液を引き金とした第三次世界大戦による核汚染、コーラップスによるゾンビ化、蝶事件による鉄血人形たちの叛乱。

元を辿ればテクノロジーを巡る人類による災禍。その代償が、眼前に広がるこの荒廃したコンクリートジャングルと灰色の空に集約されている。

「まあ、それで生計立てられているんだから、文句は言えないけどな……。」

息苦しいマスクの中でため息をついて、目的地へと向かうことにした。

——グリフィンの作戦により、とある鉄血司令部が壊滅した。

そんな情報が家で微睡んでいた俺の耳に入ったのは、三時間前のことだった。

若干膠着状態にあった鉄血とグリフィンによる紛争（もはや人類対鉄血ではないのは自明だ）がここ最近、活性化しつつある。

当然といえば当然だが、活性化というのはすなわち、戦闘回数が増えるということである。

低濃度とはいえコーラップス下における戦闘は、基本的に人形や機械同士の戦いである。人的被害も多少はあるが、主な被害は機械に集中する。

破損した装甲材や銃火器にバッテリー、生体部品、そして配線に使われている微量のレアメタル。ありとあらゆるものが金になる。

今回は鉄血司令部ときた。大量の資材と運があれば、高額で取引さ

れる鉄血ボスのパーツの一つや二つ残っているかもしれない。

基本、六時間以内にグリフィンにより立ち入り禁止にされ、調査チームによる検分が行われた後、手がかりとしてめぼしいものは接収されることが多い。

グリフィンの部隊、それも戦術人形とやり合う可能性があるのはリスク以外の何物でもないと、他の同業は嫌煙する奴が多いが、俺は違う。

相応のリターンのためには、相応のリスクが必要だと考える人種だった。

鉄血司令部はもくもくと黒煙が未だに立ち上っていた。室内に入る。電源が死んでいるのか、真っ暗だった。バイザーを暗視モードに切り替える。

鉄血やグリフィンの奴らに鉢合わせしないよう、クリアリングしながら、素早くかつ慎重に内部へと進んでいく。こういうときばかりは、忌々しい古巣の癖が役に立つ。

鉄血人形のものだろう、血のような紅いオイルやパーツが道中、あちらこちらに散らばっていた。……よかった、どうやら俺が一番乗りのようだ。

普段なら宝の山だと尻尾振ってリュックいっぱいにかき集めているところだが、目指すべき宝は最深部にある。

鉄血司令部の構造は、多少の差異はあれど、戦略的重要性があるものを除けば、共通の設計思想で作られ、共通の区画が存在する。

なので、通路の構造も似ていることが多い。迷子になることもそこまでない。基地としてそれはどうなんだ、という疑問の余地は、グリフィンの奴らが勝手に考えていけば良いことだ。

制限時間がある身としては、非常に探索が楽で助かる。

余計なことを考えられるくらいには何事もなく、俺は目的地の最深部へとたどり着くことに成功した。

どうやらここでエリアボスか、ただの雑魚かはわからないがドンパチやり合ったらしく、他の場所よりも、破損が激しくなっていた。

酷い状況にはなっているものの、スーツによれば、コーラップス濃度はゼロ。一応機密区画だから、防護はしっかりしているということか。防護ヘルメットを引き上げて、顔を外気にさらす。

「——っはあ……、っえっほ、げほ。煙くせえ。」

何をトチ狂ったか、新鮮な空気を吸う感じで深呼吸しようとしてしまった。煙を吸い込み、むせた。

ただ、嚴重にフィルタリングされたマスク越しの呼吸は苦しい以外の何物でもない。呼吸面で言えば、まだ酸素ボンベの方がましだったりする。重量的に絶対に使わないが。

ここも暗視モードでなければまともな視界は確保できないが、サブマシンガンのフラッシュライトを点けてカバーする。

「さて……、今日の幸運の女神サマは微笑んでるのか否か。」

ここまで破壊が徹底されれば、生きている人形は皆無だろう。とはいえ、先ほどよりも慎重に歩を進める。動かないと思ったスクラップに撃たれて死んだ同業の話は枚挙に暇がない。

少し進んだ辺りで、俺の直感が何かをつかみ取ったのか、左方の隅の部分が気になり、銃口を向ける。

——そこには、銀髪の少女が壁にもたれる様に座り込んでいた。

「こいつは……グリフィンの人形か……。」

破損したアサルトライフルが近くにあつたから分かる。こいつは間違いなくグリフィンの人形だ。

それにしても状態が悪い。頭部ユニットはほぼ無傷。座り込んでいると思つたが、跡形もなく下半身が吹き飛んで、たまたま立てかけた状態になっているだけだった。

左腕は引きちぎられたのか、配線はむき出しになっており、戦闘の激しさを物語る。

装甲服は無残に破かれており、白い肌と大き目の乳房がむき出しになっている。

顔の見てくれも含めれば劣情の一つでも催すところだが、あいにく生体部品で作られた表層からはケーブルがむき出しで、血液を模した冷却液が滴っており、無残な死体、というイメージが先行する。

グリフィンの人形自体、元は民生モデルを改造したものだ。ハイエンドならまだしも、戦闘用の改良を加えられた鉄血のものと比べると、部品にそこまでの価値はない。

他にめぼしいものはないか、探そうとしたところで、人形と目が合った。機能停止している状態で、そんなはずはない。

だが、血涙を流しながら、ライトグリーンの瞳が俺を射抜いている、そんな感覚を覚えた。

「そんな映画あつたな……。」

ぼやきつつ、銃口を外さず、人形のもとにしゃがみ込む。完全に機能停止しているはずなのだが、どうにも、今にも動き出しそうな気配を感じるのだ。

「いや……動きたがつてる……か？」

我ながら、なんとロマンチックな感性だろう。自分で言っておいて、笑えてくる。

だが——、人形は、人間のために文句も言わず、挙句、使い捨てられるだけの消耗品。そんな言葉が頭に浮かんできた。

「感傷にしちや、笑えない行動だぞ、俺……。」

そう自嘲しながらも、俺は人形の亡骸を抱え上げる。

ガシャンという音に、この行為の無意味さを咎められる気がしたが、気にせず、持ってきたロープで背負いやすいように固定し、背負う。

背負ってからは、今日はこういう日なのだと、頭を切り替えて、探索を再開したのだった。

セカンドチャンスへ2

あれから約二ヶ月が経った。

「あーあ。なんだかんだで、完成しちまったな……。」

この時代において、感傷とノスタルジーほど、無意味で寿命を縮めるものはない、と随分前に言われた記憶がある。

ちなみに、俺の趣味は一世紀前に流行ったSF作品を楽しむことだし、住み着いた家は、かつてシリコンバレードリームが芽吹いたという、武骨なメタルラックに囲まれた旧世代のガレージのような状態になっている。

そして、俺の目の前に置かれたこいつこそ、無意味を体現しているのだろう。

——俺が拾った、大破したはずの人形は五体満足な状態で眠っていた。

五体満足にしたのは言うまでもなく、俺だ。我ながら、よくやったと言いたい。

風穴空いて涼しそうなボディユニットは、闇市で買ってきたセクサロイドのものを取り付け、脚は一本数十万クレジットする超激レア軍用人形の脚を贅沢に二本も使用し、千切れた左腕はこれまた激レアの鉄血人形のをくつつけた。重心バランスやらいろいろ考慮しながら、フレームサイズを変えたり、もはや修理ではなく、設計や新造の域にまで達していたのである。

途中からはもはや趣味の領域に突っ込んでいた。最初から感傷に浸った自慰にしか過ぎないのだが、程度がひどかった。

おかげさまで本業はほぼお休みで、寝食を忘れるというが、今回の場合は仕事を忘れ、生活資金も食料も目減りしていた。最高のストレス発散になったのは間違いない。

「そして、極めつけが、今からこの鉄血人形のコアユニットを使うってところだよな……。」

——そう。センチメンタルオナニーがあまりにも度を越えそうなのは、今からである。

戦術人形に使われるコアユニットは非常に貴重だ。民生品である人形たちが戦闘行動する上で必要なものがブラックボックス化されてパッケージングしてある。

戦術人形こそポピュラーになったが、それでもIOP社の機密でんご盛りの存在で、コアはまずリバースエンジニアリングできない。つまり、IOP社以外、誰もその技術を再利用できない。

本来コアを後付けする形で作られる戦術人形たちなので、コアなしでも起動するはずなのだが、今回はおそらく起動しないだろう。

頭部と右腕以外、原型をとどめていない状態で、新しくパーツを取り付けている。しかも鉄血のパーツまで使っているの、各パーツ・ユニットの統合と最適化が必要だ。

技術は再利用できないが、コアの機能をそのまま使うことくらいはできる。コアには、そういう調整も一手に引き受けてくれるのだ。確かイニシャライズ、と言ったか。

ちなみに、こいつのコアは機能停止していた。というか、風穴に近かったので四分の一ほどなくなっていた。そこで、白羽の矢が立ったのが、鉄血人形のコアである。

こいつを拾った後、持って帰れるものは限られていたものの、こいつと交戦したと思われる人形の左腕、そしてこの正体不明のコアが転がっているのを見つけた。

コアと表現しているが、鉄血人形のコアは今まで見たことがない。グリフィンの人形のものは何度か見たことがあったので、おそらく、コアであろう、という判断だ。

ただ、形状こそ似ているが、生体部品で一部構成されているらしく、この掌大サイズの見た目は非常にグロテスクである。

この不気味に脈動するこの心臓を、IOP社辺りに引き渡せば、管理区どころか国家統治区^{ミッドエリア}で遊んで暮らせる金が手に入る。おそらく。そんなチャンスをふいにして、起動もするかどうかわからない、このがらくた人形を蘇生させようとしているのが、最高にオナニーなのだ。

——百人に聞いて百一人が、頭イカれてんじゃねえのか、と答える

だろう、そういう行為なのだ。

そこまで振り返ると、幾許かの後悔の念が頭をよぎる。この生活が気に入っていないわけではないが、いつ死ぬかも分からない場所よりも安全な場所で暮らせることに越したことはない。

胸部に格納しようとしていた右腕の動きが止まる。人形を見やる。拾った時と違い、目は閉じてある。

あれだけつぎはぎしたのにも関わらず、人工皮膚はパーツの上でしっかりと癒着し、白い裸身は芸術品のようであり、人間のそれだった。

ただ、左腕だけは、人工皮膚とうまく結合しなかったのか、ケーブルがうっすらと浮き出ており、やはり機械であることを意識させた。

——あとは、胸部スロットにコアを入れればいいだけ。「今更ためらうな……俺。」

頬を張る。らしくない。別に金のために生きてるわけじゃないだろうに。だったら最初から拾わなかったらいいだけなのだ。

鼓舞するように声を出してから、俺はスロットにコアを押し込んだ。すると、電気ショックを受けたように、人形の身体がビクンと弾んだ。思わず腕を引き抜いて、後ずさる。

コアを認識した胸部スロットが勝手に閉じる。刹那、人形の目が見開かれた。

「アツ、ウ、ア、ツアああアアアア……!!!」

人形は両腕で胸を押さえながら、ベッドでのたうち回り、床に落ちる。鉄血コアは流石にまずかったか——。動転しながらも、俺は棚に置いていた拳銃をつかみ取り、セーフティを外す。

落ち着け、この距離なら外殻ごとコアを射抜ける。そうすれば機能停止して、元のガラクタに戻る。大丈夫だ、いつものようにやればいい。

しかし、銃口は向けつつも、撃てない自分がいた。体感にして数分か、ひたすら呻き苦しんでいた人形の動きがピタリと止まる。暴れていた四肢からだらりと力が抜ける。

コアに耐えきれなくて自壊した？ 恐る恐る俺は人形に近づいて

みる。人形の顔を窺うと、あの時と同じようにライトグリーンの瞳が俺をじつと見つめていた。

「——無抵抗の相手に銃を突きつけるなんて、随分非情ね。」

そんな言葉に虚を突かれてしまい、一瞬動きが止まってしまう。すると、人形は俺の脚を払い、体勢を崩す。背中を強打し、肺から空気が抜け、全身に力が入らなくなる。

人形はいつの間にかに立ち上がって、蹴りで俺の手から銃を払いのけ、鳩尾に踵を突き刺そうとする。——軍用人形の脚の踵落としなんてたまったものではない！

無理矢理体を動かし、ギリギリのところまで、右腕で踵をいなす。猛烈な勢いで迫っていたはずが、ぺたん、と白い足はコンクリートで気の抜ける音を出した。

ほっとしたのも束の間、俺の眉間には銃口が付きつけられていた。先ほどまでと逆で、人形は地に倒れた俺を見降ろしていた。

「チェックメイト。あなたの運もそこまでね。」

「そう、みたいだな……。」

ライトグリーンの瞳は先ほどと変わらず、俺をじつと見つめている。何を考えているのか、まるで読めない。

しかし、引き金を弾くこともなく、人形は俺に銃口を向けてくるだけで何もしてこない。膠着してしまった。

銃口が外されないことだけが心配だが、両手をゆっくりと前に出しつつ、口を開く。

「……あの、質問いいか。」

「ええ、いいわよ。」

「お前は鉄血か、グリフィンか、どっちだ。」

人形の目が細くなる。

「仮に私が鉄血って答えたら、って考えたら、その質問は愚問じゃないかしら。」

「……じゃあ、いきなり銃を突きつけるなよ……。」

「あなたが先に向けてきたんじゃない。私はあの状況でも覆せることを示しただけ。そういえば、自己紹介がまだだったわ——、HK41

6よ。ちゃんと覚えていてね。」

どつと緊張が弛緩した。拳銃を突きつけたまま、自己紹介をした人形。いや、HK416と言ったか。

人間は五感を刺激された状態であれば、強く記憶が残るのだ。ちゃんと覚えるも何も、絶対に忘れることもないだろう。こんな状況だし、何より――。

「……闇市で買ったにしてはしっかりした作りになってるな……。」

一回見たけど、やっぱあそこの闇市にしては上等すぎる、今度奴にでも教えてやろうか。俺が銃口から目線を横にずらす。

HK416は一瞬、怪訝な顔をするが、視線の行く先に顔を真っ赤にする。刹那、ライトグリーンの瞳に怒気を孕ませた。その様子で悟る。あつ。口に出ってたか。ここまで一瞬の思考であった。

「そ、そんなことは記憶しなくていいッ！」

——ゲシッ!!

一度は回避したはずの踵落として、俺の意識は容易く刈り取られたのであった。

セカンドチャンスへ3

「――目が覚めたかしら？」

次に覚醒した時、ライトグリーンの瞳が俺を見つめていた。蛇に睨まれた蛙の気持ちがあつた気がする。心臓が止まるかと思つた。

「……至近距離で覗き込むのはやめてくれないか。」

びつくりしすぎて碌に驚けなかつた俺は、努めて平静に文句を言う。

彼女、たしかHK416と言つたか――は、俺の言葉でようやく離れる。天井の裸電球が見えた。痛む頭を押さえながら、上体を起す。どうやら俺はベッドで寝かされていたらしい。

「つつつ……、俺、何時間気絶してたんだ。」

「二時間と十二分二十七秒。打ち身はあるけど軽い脳震盪よ。脳や頸部にダメージはないわ。安心して。」

流石機械、正確にカウントしていた。

やった犯人が何を言うか、というのはこの際黙つておくことにした。追撃を食らいたくはない。

ただ抗議の視線だけは送つておく。彼女は俺の視線に含まれたものを感じ取つたのか、居心地悪そうに眼をそらす。

と、ここでようやく彼女に違和感を覚えた。それもそのはず、俺のジャケットを羽織つただけの格好だつた。それ以外着てないものだから、形の良いお椀型の胸がよく見える。――さつと胸元を隠される。

「――また蹴りたい？」

今度は俺が視線を向けられる番だつた。慌てて目を逸らしておく。「……いいや、遠慮しておく。服なら向こうのカゴにあつたはずだ。適当に着てこい。」

「了解。」

そう言うとき彼女は立ち上がり、しっかりとした足取りで、服を探しに行つた。

「……想像以上に直ったな……。」

彼女を見送りながら、率直な感想が口からこぼれた。

元はスクラップ同然、いやスクラップそのものだったのに。こうして手を尽くしてみれば、完全な人形として蘇っている。

勿論直ればいいな、とは思わなかったわけではない、そのためにありとあらゆるものを使った。実験的な要素も含んでいたし、もし動くのならお手伝い程度してもらおうかな、と思っていたくらいだ。

ただ、そのなんといえいいのか、想像以上だった。戦術人形をはじめとするIOPの人形は何度も見たこともあるし、会話をしたこともある。

疑似とはいえ、人間との会話に堪え得る思考を持っているのは体感している。

「……服って、襪襦切れればっかりじゃない……。酷い臭い……。」

人形は籠の中の服を見て、渋面を作っていた。

——だが、どうだ、あの人形は。あまりにも自然すぎる。

AIが搭載されている頭部ユニットはほぼ無傷だったとはいえ、人形の疑似人格とはあそこまで緻密だったか。

鉄血のコアの性能が良かったのか？ まあ、意思疎通が図れるのなら、人形だろうと人間だろうと変わりはないか。意味のない思考を放棄する。

「着替えたわ。」

ぼんやり虚空を眺めていたところで、人形が戻ってきた。

素っ裸とは異なり、ブーツにスパッツ、そしてワイシャツ——この野郎、ちやつかり状態のいい売り物を選びやがったな。そして、俺のジャケットは着たままだ。

「どう？ ごみ溜めから選んだにしては、マシなもの選んだでしょう？」

「目と口の調子がいいことは分かった。あと、俺のジャケットは返してくれ。」

「嫌よ。」

随分反抗的な性格設定だな。

「嫌じゃない、俺の一張羅だ。返せ。」

「現時刻をもつて、私の一張羅になったわ。だから返却という選択肢はそもそも存在しないわ。」

よっほど気に入ってるのか、絶対に脱がないぞ、と言わんばかりに裾を握りしめている。

仕草こそかわいく見えるが、表情は真剣そのものだった。どうやら奪還は難しそうだ。強情で面倒な人形だ。

「……わかった、わかったよ。お前の快気祝いってことでくれてやる。」

「ふふ、最初からそう言えばいいのよ。」

俺の答えに満足したのか、人形はうつすらと笑みを浮かべながら、ベッドの隣にあつた椅子に腰かける。

ここで会話が途切れる。こういう沈黙はあまり好きじゃないが、俺から話すのは何か違うような気がして、黙ることしかできなかった。

「——まずは、助けてくれて感謝するわ。」

人形は居心地悪そうに脚を組み替えながら、口火を切った。

「あなたが居なかつたら、私はあのまま朽ちていた。——壊れたまま、見捨てられていた。」

俯き、ぎゅつと拳を握りしめて、絞り出すように言葉を紡いでいた。
「お前を助けたのは、単なる偶然だよ。……で、お前はグリフィンの所属の人形で間違いないか。あのダメージからして、鉄血の人形とやり合つて、大破したって感じだったから、何か作戦中だったのか。」

大破、という言葉で人形の肩が震える。

「ええ……多分、そのはずよ。」

「多分っていうのは。」

「私、記憶がないの。」

記憶がない。つまり、メモリログデータを破損したということか。あれだけのダメージだ。外傷はなくとも、多少なり影響があつたのだろう。ありえない話ではない。

バックアップはサーバーに残つてあるだろうが、グリフィンの基地で読み込み作業が必要になる。現状復旧はできない。

「覚えてるのは、自分が死ぬ直前の記憶と、あなたに拾われる瞬間の記憶だけ。自分の名前とグリフィンの人形であることはシステムデータから読み取っただけよ。」

「どうやら見られている、という感覚は、あながち間違いではなかったらしい。予備電源か何かが生きていたのか。」

「……最初に左腕を無理やり引きちぎられたわ。痛覚をカットしていても、抜かれる感触だけは取り除けなかったの。」

「そうして、一瞬動けなくなっただけからは、右脚をショットガンで粉砕されたの。体制を崩したところで、左脚に二発。その時にはもう諦めていたの。だけど——。」

人形は、その先を言おうとして、手で顔を覆う。

「——あいつは笑って、わ、私の胴体に、何度も何度も何度も、散弾をツ、もう壊れているのに、動けつ、ないのに……死ねないまま、あいつは私を嬲り続けたの！」

「カットしたはずの痛覚が、つ、痛くて、怖くてつ、悔しくて……ツ！」

「もういい、もう何も言うな。」

錯乱した人形を抱き寄せ、背中をさする。PTSDの発作に似ていた。小刻みに体は震えていて、くぐもった嗚咽が胸に響く。小さい躰がさらに小さく感じて、強く抱きしめた。

人形の言動はもはや支離滅裂でしかなかったが、その時の悲痛な状況だけは十二分に伝わった。

兵器であるのにもかかわらず、少女の似姿を取るこの人形を見て、少しばかりIOPを恨めしく思った。

「死にかけはしたが、お前は生き残ったんだ。もうお前を害するものはいない。落ち着け。ここは安全だ。」

ゆつくりと言葉をかけながら、頭を撫でる。人間は頭を撫でられるとリラックスするらしい。人形に効くかどうかはわからない。

それでも俺の言葉を聞いてか、ふーっ、ふーっ、と呼吸を乱しつつも、徐々に震えは収まっていく。

「落ち着いたか？」

腕の中で、人形は首を縦に振る。

「これからどうしたい。色々継ぎ接ぎしたが、グリフィン所属の人形なら、受け入れてくれるはずだ。管理区の入口までだったら、案内してやってもいい。」

ふるふると首を横に振って、しがみつくように、俺の服をしつかりと握りしめる。

「……私のコアは鉄血のものでしよう……、きっと解体される……。もう壊されたくない……死にたくない……。」

反抗的な性格の癖して、随分弱気な返事だった。とはいえ、彼女の言い分も分かる。

「じゃあ、どうする。俺は、無条件で保護できるほどお人良しじゃないぞ。」

それでも、あえて突き放す。人形だって、立派な疑似人格で考える力を持っている。この灰色の世界では、選択を常に強いられる。

選ばなければ、緩やかに、そして確実に死に辿り着いてしまう。意なききものは意思あるものに食われる弱肉強食の世界。

一度は食われた彼女は、こうしてセカンドチャンスを得たのだ。だからこそ、選ばなければならない。どんな選択でもいい、奮い立ってくれると信じて。

ようやく人形の顔がこちらを向く。人形に涙を流す機能は搭載されていない。その表情はある種の覚悟を感じさせるものだった。

ただ、涙を模した赤色のタトゥーが、彼女の代わりに泣いていた。

「……貴方が望むもの全部、私が手配する。これからずっと私が、貴方にとって価値のある一番の人形だということを証明し続ける。」

人形は、自分の存在意義を確かめるように、はつきりと自分に言いつけるように、強く、酷く底冷えする声で、宣言した。

「——貴方の邪魔をするなら、鉄血だろうとグリフィンだろうと誰であろうと、壊すわ。貴方が望むのなら、好きに犯して蹴って蹂躪して。私は拒まない、貴方をすべて受け入れる。」

その代わり——、私の全てと引き換えに、貴方を貰う。貴方から絶対に離れない。……離さない。」

全身の産毛が総毛立つ。

ただならぬものを感じて無意識的に離れようとする。しかしできない。いつの間にか、俺の服にしがみついていたはずの腕は首に回されていった。

目を逸らそうとしたところで、両手でしつかりと人形の目を見るよう、頭を固定される。

「もう一度言うわ。私は、HK416。今日から、貴方だけの人形になります。最期の一呼吸が終わるまで、離れないでくださいね。」

俺と居ることを選んだ彼女の目は、決して忘れることはないだろう。

そのライトグリーンの瞳には、仄暗いものが浮かんでいた。